

鵜川水系河川整備基本方針

土砂管理等に関する資料（案）

平成19年7月31日

国土交通省河川局

目 次

1.流域の概要	1
2.河床変動の状況	3
3.河口部の状況	5
4.まとめ	6

1. 流域の概要

鶺鴒川は、その源を北海道勇払郡占冠村の狩振岳(標高 1,323m)に発し、占冠村においてパンケシュル川、双珠別川等を合わせ、赤岩青巖峽を流下し、むかわ町穂別において穂別川を合わせ、むかわ町市街地を経て太平洋に注ぐ、幹川流路延長 135km、流域面積 1,270km²の一級河川である。

その流域は、北海道の胆振東部に位置し、むかわ町、占冠村の 1 町 1 村からなり、胆振東部における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山林が約 83%、水田や畑等の農地が約 5%、宅地等その他が約 12%となっている。特に、中下流部は農耕地として明治初期からひらけ、水田、肉用牛の牧畜等が営まれるとともに、近年は「鶺鴒川牛」、「穂別メロン」や商標登録が認められた「鶺鴒川シシャモ」等地域ブランド化への取り組みが活発に行われているほか、花卉栽培は全国有数の産地となっている。また、JR日高本線、JR石勝線、国道 235 号、国道 274 号、国道 237 号の基幹交通施設に加え、日高自動車道、北海道横断自動車道が整備計画中であり、交通の要衝となっている。

さらに、鶺鴒川はシシャモやサケ等が遡上し、河口干潟はシギ・チドリ類のシベリアとオーストラリア等を結ぶ中継地として利用されるなど、豊かな自然環境に恵まれている。このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

河床勾配は、源流から占冠村市街地に至る上流部が、1/150 以上であり、占冠村ニノウから川西頭首工付近までの中流部は約 1/100 ~ 1/1,000、川西頭首工付近から河口までの下流部は約 1/1,000 である。

流域の地質は、上流部はジュラ紀から白亜紀の玄武岩、蛇紋岩、泥岩、砂岩等が分布する。中、下流部には白亜紀から新第三紀の礫岩、砂岩、泥岩等が分布する。上流部の谷底平野や中下流部の川沿いの低平地には第四紀の段丘堆積物等が分布し、河口部では三角州堆積物や海浜砂層が分布する。

流域は南北に細長く、高低差があることから上流部と下流部では気象が異なり、平均年間降水量は上流部の占冠村で約 1,400mm、下流部のむかわ町で約 1,100mm である。

現在、鶺鴒川流域には、取水用のダム 2 基(穂別ダム、双珠別ダム)と多くの横断工作物が存在し、うち直轄管理区間においては、農業用の取水施設として川西・川東の 2 基の頭首工が存在する。いずれも整備済みであることから、近年においては河道に対する土砂流出は比較的少なく安定している。

表 1-1 鶴川流域の概要

項目	諸元	備考
流路延長	135km	全国 29 位/109 水系
流域面積	1,270km ²	全国 52 位/109 水系
流域市町村	1 町 1 村	むかわ町、占冠村
流域内人口	約 1.3 万人	
支川数	19	

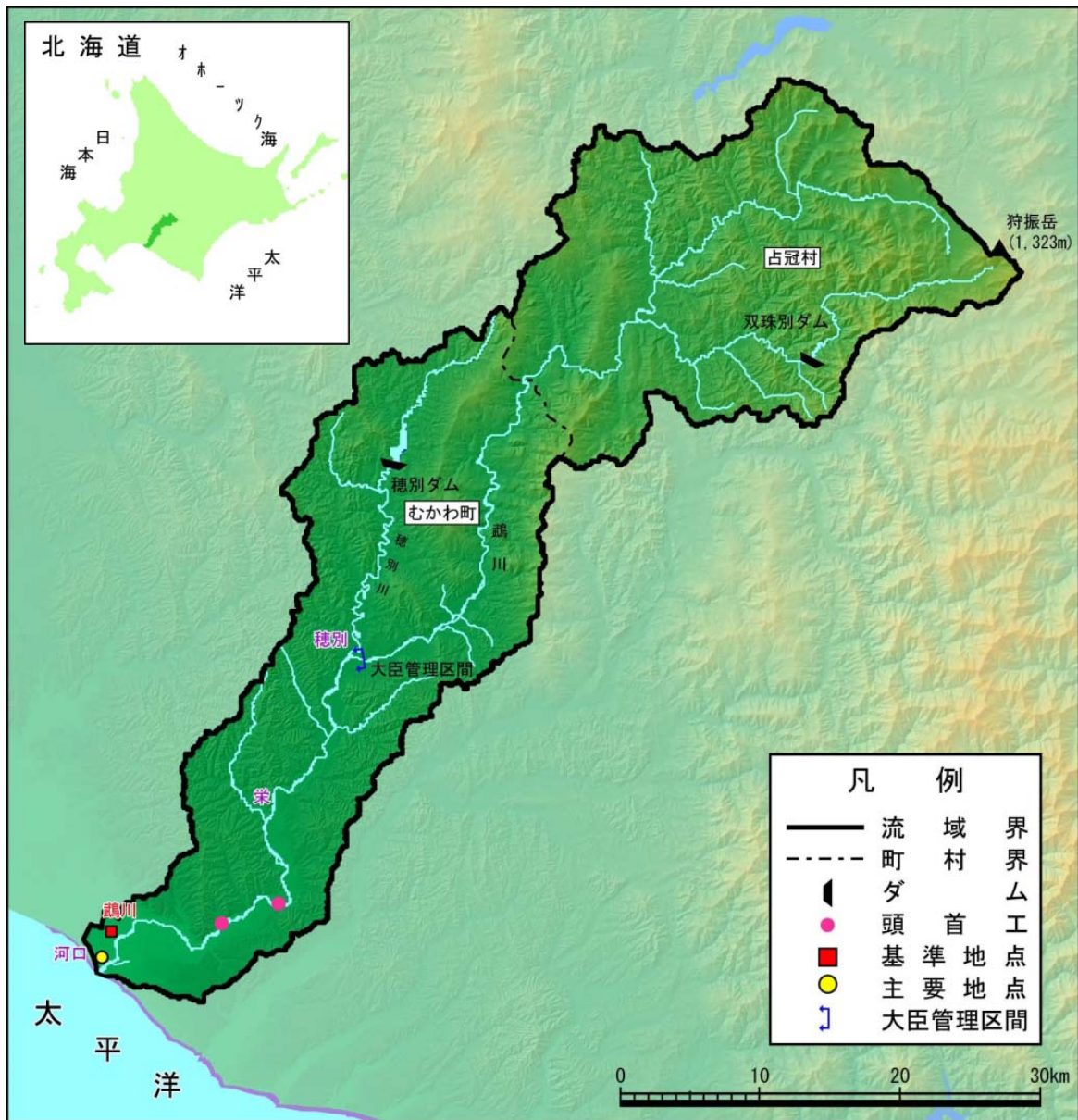


図 1-1 鶴川流域図

2. 河床変動の状況

2-1 河床変動の縦断的变化

既往 38 年間(昭和 41 年～平成 15 年)の低水路平均河床高は、昭和 41 年～平成 10 年にかけて河床低下の傾向が見られ、特に昭和 41～42 年に改築された川西頭首工(KP13.0)、川東頭首工(KP18.0)下流では、その傾向が顕著である。砂利採取が規制された平成 10 年以降、縦断的に顕著な変動は見られず、比較的安定している。

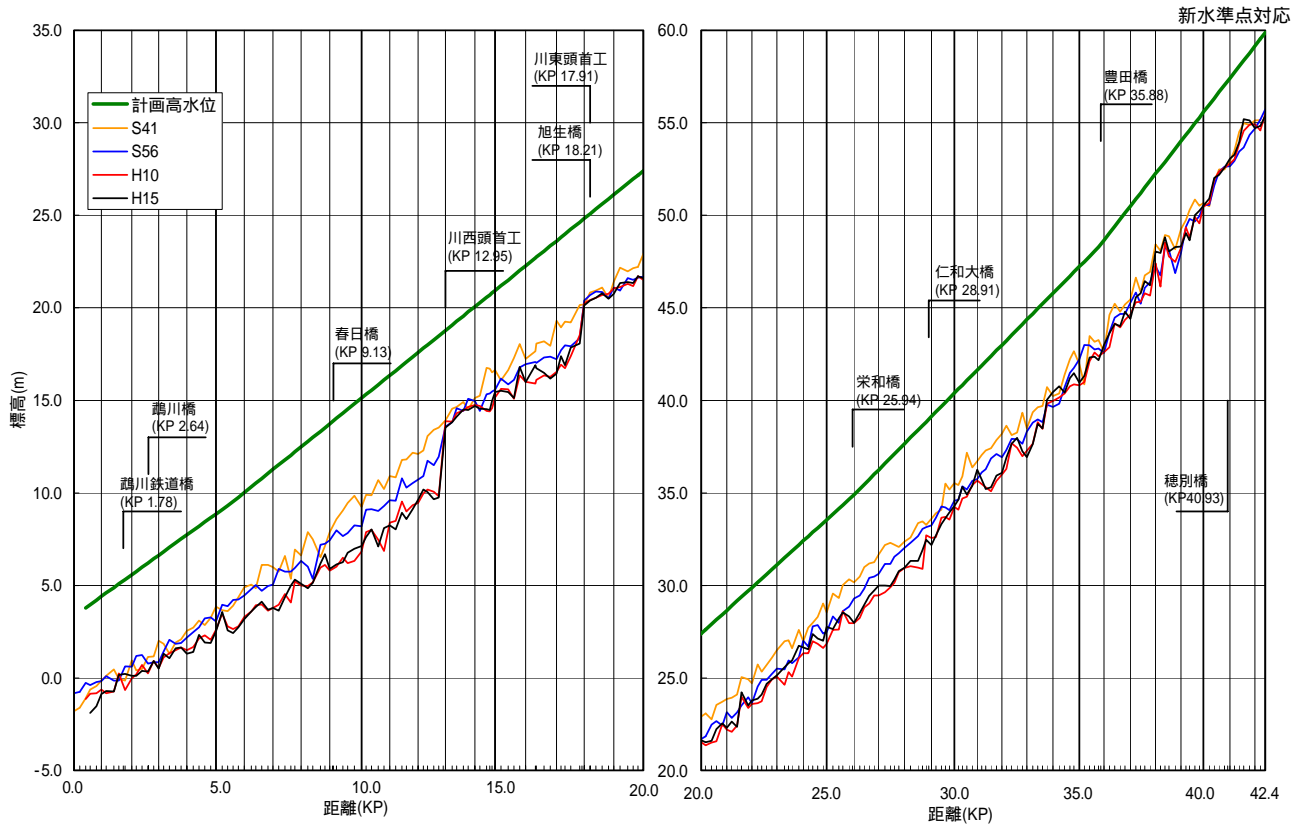


図 2-1 低水路平均河床高縦断図

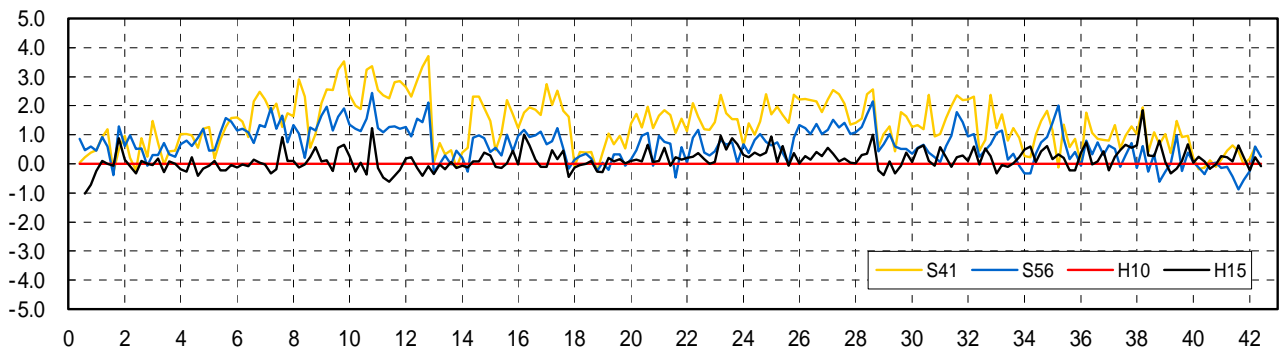


図 2-2 河床変動縦断図(平成 10 年基準)

2-2 横断形状の変化

鷓川では、低水路掘削、護岸工事等による河道改修や砂利採取等による横断形状の変化が見られるものの、近年では大きな変動はなく、ほぼ安定した河道となっている。また、顕著な侵食・堆積の傾向も見られない。

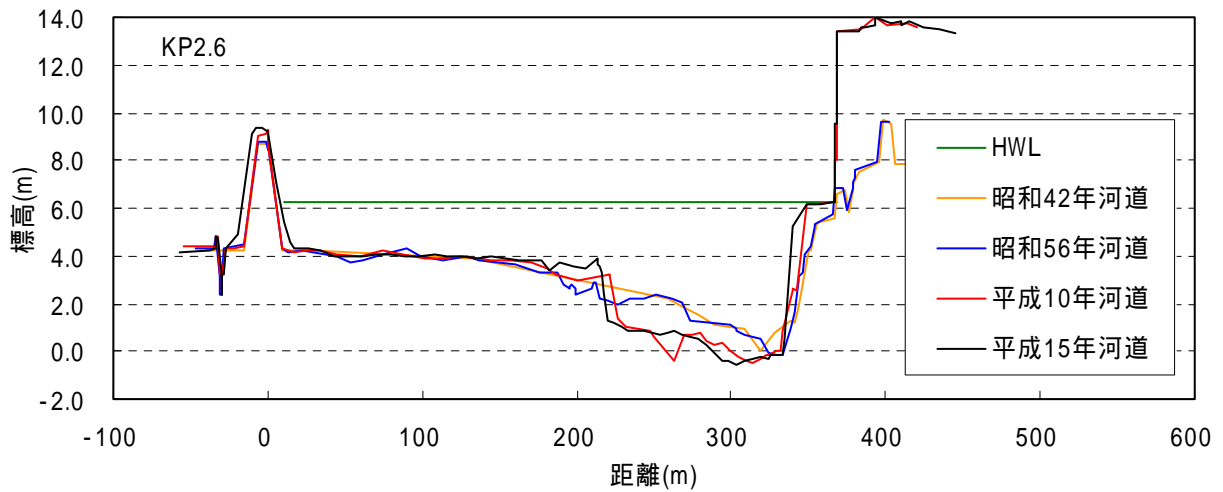


図 2-3 鷓川地点(KP2.6)横断変遷図

2-3 河床変動の経年的変化

全川にわたり、経年的に、大きな侵食・堆積の傾向は見られない。

既往 38 年間(昭和 41 年～平成 15 年)における全川での河床高の変動量は、低水路掘削や頭首工設置、護岸工事等が実施され、改修直後に河床高が若干低下するが、その後、それらの箇所において大きな河床高の変動は見られない。

長期間で見た場合には、変動は少なく、比較的安定している傾向が見られる。

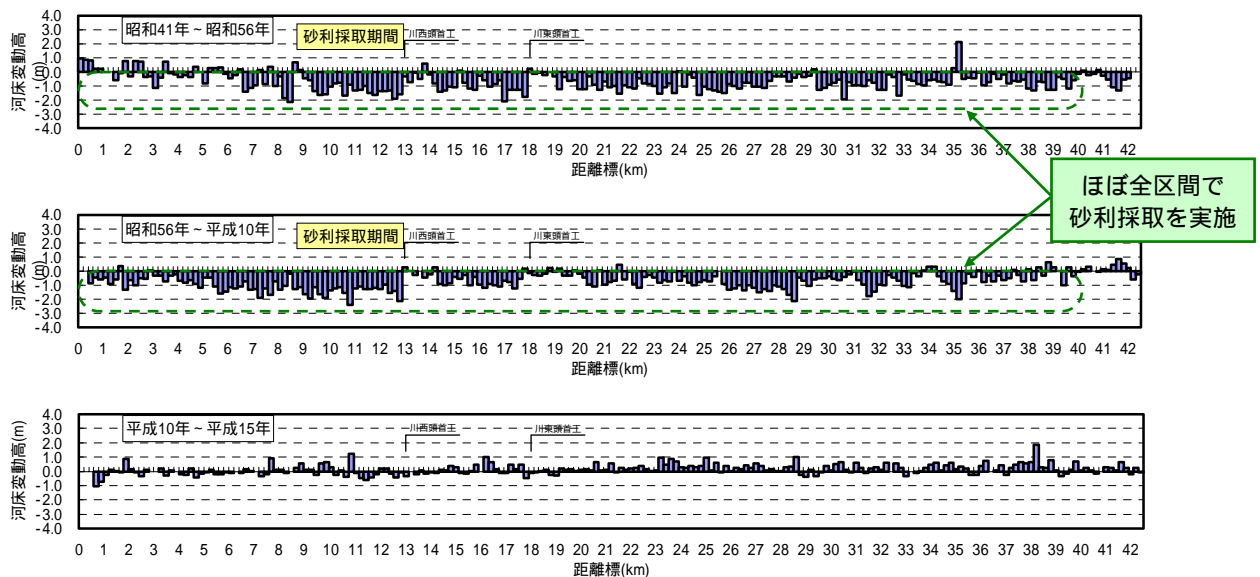


図 2-4 河床変動高経年変化図

3. 河口部の状況

3-1 河口部(海浜部)

昭和 22 年の汀線に対して、平成元年代にかけて汀線が後退しているが、砂利採取を平成 10 年以降規制しており、近年の汀線は比較的安定している。鵜川漁港は、鵜川河口から約 2km の位置にあり、昭和 48 年に着工し昭和 55 年に完成している。

鵜川の河口部は、砂嘴が発達するものの、洪水時にはフラッシュされ、河口閉塞は生じていない。

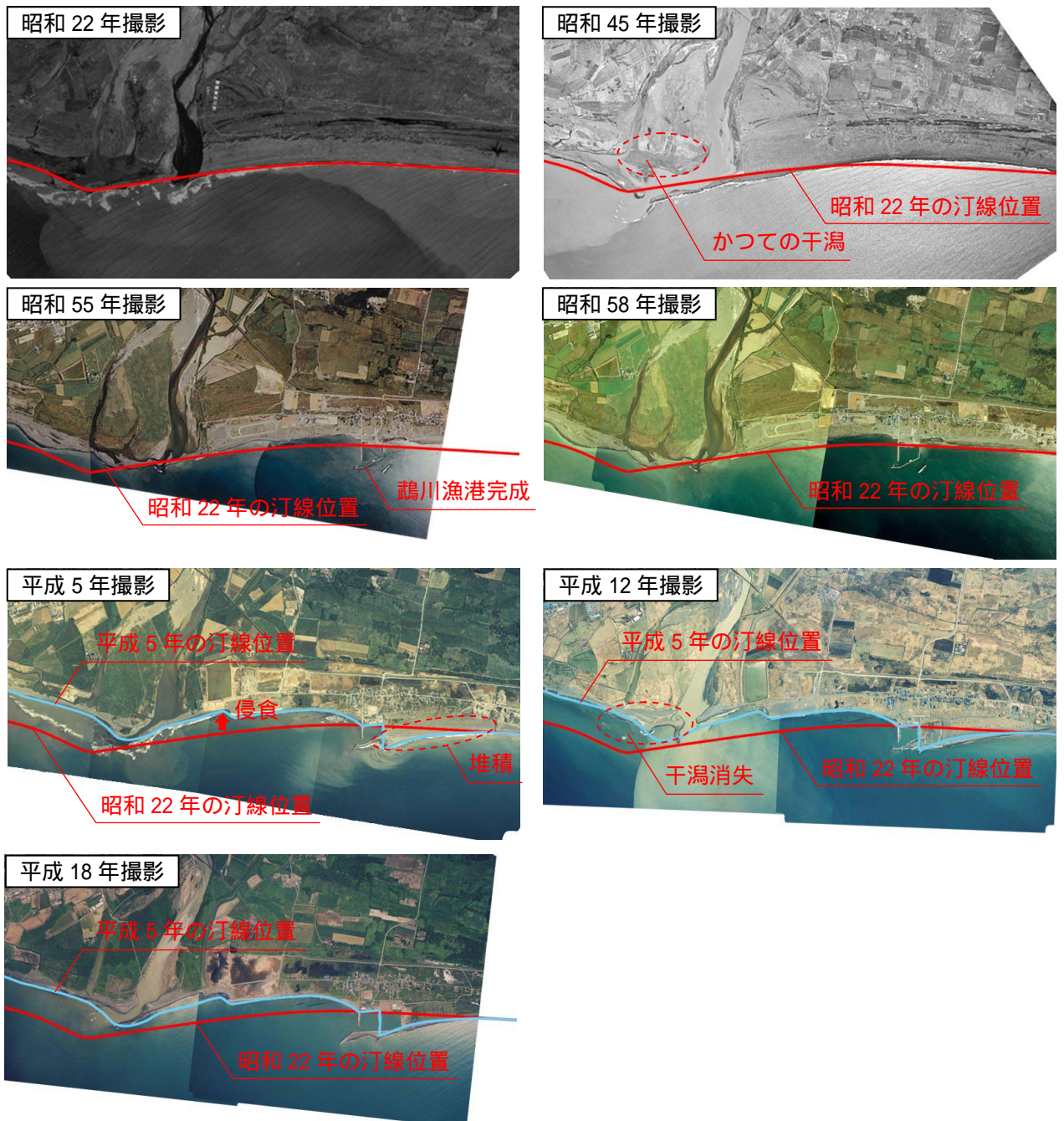


図 3-1 河口部(海浜部)の経年変化状況

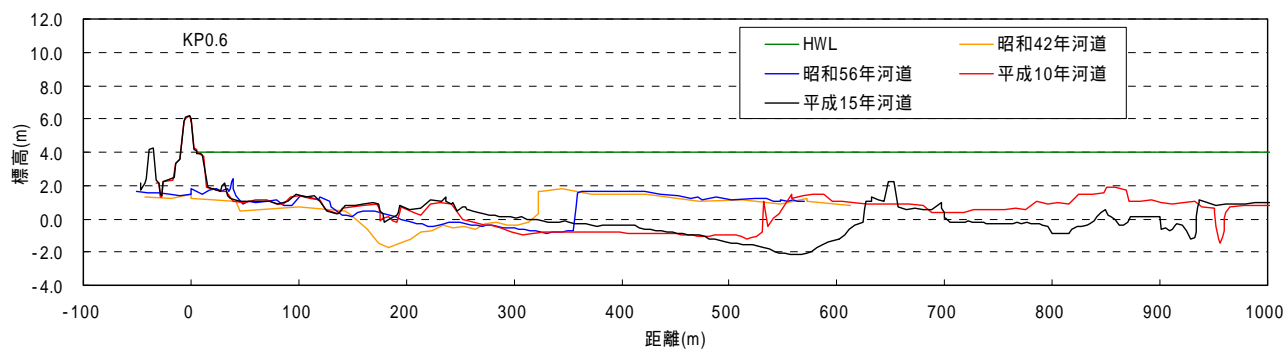


図 3-2 河口部横断変遷図

4.まとめ

鵜川の土砂動態については、38年間の低水路平均河床高の縦断的、時間的变化などについて検討した結果、昭和40年代から平成9年の砂利採取に伴い河床低下が生じたが、近年では変動が小さくなっていることから、土砂動態は安定しているといえる。

河口部については、過去に汀線の後退が認められたが、近年では比較的安定していることから、現状と同程度以上の安定性を維持するよう努める。また、河口の閉塞は見られていない。

引き続き河床変動や各種水理データの収集等モニタリングに努め、適切な河道管理へフィードバックしていく。